

〈子供〉を生むこと

— 埴谷雄高『死霊』の中の〈反出生主義〉 —

藤 井 貴 志

1 埴谷雄高と〈反出生主義〉の問題系

「子供を生むこと」——。「埴谷雄高氏への質問」(『文藝』昭和38・10)と題された三十二項目あるアンケートの中で「あなたが寛大になれる過ちは？」と問われた埴谷は、そのように応えている。「あなたの好きな職業は？」に「宇宙占い師」、「好きな現存の女性は？」に「何処かのマダム」と応答する等、はぐらかしや諧謔も少なくないこのひと続きのアンケートにあつて、「子供を生むこと」は「過ち」だと断ずるこの一節は、読む者を不意打ちにする強度において、ひと際異彩を放っている。もう一箇所、「好きな動物は？」と問われた埴谷が「単性生殖するもの」と応じる一節も「子供を生むこと」に対する〈否〉と銜し合う極めて重要な回答に他ならない

〈子供〉を生むこと

のだが、いずれにしても「生むこと」をめぐる埴谷の思考の裡に〈反出生主義〉(Anti-Natalism)に共振する側面があることは間違いないようなのだ。たとえば〈反出生主義〉の強力な推進者、デイヴィッド・ベネターは『生まれてこないほうが良かった——存在してしまふことの害悪』⁽¹⁾の中で次のように述べている。

私たちの誰しもが、生まれさせられてしまったことで害悪を被っています。その害悪は無視できるものではなく、たとえばそんなに質の高い人生であっても、人生は非常に悪いものなのです。大抵の人がそう認識しているよりも遥かに悪いのです。はいえ、私たち自身の誕生を防ぐにはもう遅過ぎます。しかし、将来生まれてくる可能性のある人々の誕生を防ぐことはできません。というわけで、新しく人々を生み出すことは道徳的に問題があるのです。

二〇〇六年に原書刊行、二〇一七年の邦訳を経て広範な議論——とりわけ川上未映子『夏物語』への触発は記憶に新しい——を巻き起こしたベネターのこの著書を、一九九七年に没した埴谷が目にするとはなかった。そもそも分析哲学のベネターと、獄中でカントの『純粹理性批判』に震撼され、その後ドストエフスキーを經由することで『死霊』即ち「小説という手段による形而上学の創立」^③へ向かうことになる埴谷とではその問題の提出および展開に同期し難い差異が認められることは確かであり、性急に両者を接続することには異論もあるかもしれない。「害悪（例えば、苦痛）と利益（例えば、快樂）の間には決定的な違いがあり、その違いから存在には優れている点は全くなく、存在は不利な立場にある」として、否応なく苦痛を孕まざるを得ないこの生（存在）を功利主義的に弾劾しつつ（反出生主義）（非存在）の優位を論証していくベネターと、「歯痛にだって快樂はあるさ」というドストエフスキー『地下室の手記』^④に導かれ、「人間は利益を欲するばかりでなく、しばしば自身の不利益を欲する。苦痛は快樂であり、絶望すら快樂であるといったような、これまでの正常な考えでは思いもかけない種類の逆転した考え方」^⑤に賭ける埴谷とではまるで相容れないように見える。だが、にもかかわらず両者は「子供を生むこと」は「過ち」だと断ずる頑なな態度において奇妙な一致を示すだろう。埴谷の〈反出生主義〉とは具体的に如何なるものだったのか——ベネターに至るまで

哲学／文学を横断する形で連綿と続いてきた〈反出生主義〉の系譜の裡に埴谷を、とりわけ彼の名著『死霊』を位置付けることが喫緊の課題となるに違いない。

『死霊』には実に夥しく〈赤ん坊〉とその〈出生〉をめぐるモティーフが登場する。テクストの中枢を貫く「自同律の不快」や「虚体」といった概念の傍らで繰り返し明滅し、その中枢の概念への接近を後押し——むしろ否定的媒介として——するものこそ〈出生〉をめぐるそれに他ならない。後述するように〈反出生主義〉の思想は三輪家の血を引く四兄弟の裡、とりわけ長兄の高志に最も明確な形で担わされることになるのだが、彼以外の兄弟達も〈出生〉をめぐる思索を断片的な形ではあれふとした瞬間に閃かせる。たとえば三章（「屋根裏部屋」）の中で、三輪与志の高校時代の親友である黒川建吉の住む屋根裏部屋を訪れた首猛夫が、唐突に「君、お母さんは……？」という「まるで思いもよらぬ質問」を投げ掛ける場面を参照しよう。「すでに亡くなつています。数年前に、両親とも——」との返事を得るや否や、さらに次のような飛躍した問いを首猛夫は畳み掛けるのだ。

——君はそれをどう思う、母親の胎内から君が生れたことを？

——というと、どういうことですか？

——それはこういうことだ。そこに何らかの屈辱感なしに、疑うべからざる事実としてそれを、きつぱり認容し得るかとい

うことだ！

黒川建吉から「何らの応答も戻つてこないことを見極める」と首猛夫は「さらに強く押しこむように」次のように言う——「ふむ、俺自身は、認容せねばならぬものをも、決して認容しないぜ。それが俺の方式で——俺が嫌いなのは、必然ということなんだ！」と。子供が自らの〈出生〉の可否を予め自らの意志で決定することが不可能な以上、否応なく生み落とされ存在させられてしまった子供は事後的にその存在を「必然」として「認容」していくことを余儀なくされる。そしてそれが通れ難く数珠繋ぎに連鎖していくのが親子なのだろう。だが、首猛夫は「母親の胎内」から自らが「生れたこと」を「何らかの屈辱感」なしには「決して認容」し得ないという。〈俺は俺である〉という「自同律」を遡っていけば必ずこの〈出生〉という始源に突き当たらざるを得ない筈だ。この始源の場所を「屈辱」あるいは「不快」という気分と共に「決して認容」せず、今現に目の前にある世界への抵抗の場として開示すること——さしあたり〈反出生主義〉を鍵として『死霊』を読み直す試みを開始しよう。

2 三輪高志の〈反出生主義〉

まずは長兄・三輪高志の〈出生〉をめぐる思考から確認したい。

〈子供〉を生むこと

体調の悪化もあり、昭和二十四年十一月を最後に『死霊』四章「霧のなかで」の中断を余儀なくされた埴谷が、長い時を経て五章「夢魔の世界」を『群像』に一挙掲載するのは昭和五十年七月のことである。『死者の電話箱』の挿話を含むこの五章は紛れもなく『死霊』の一つの山場を形成するものだが、本論にとつてこの章が忽せにできないのは、三輪高志とその恋人・尾木節子をめぐる以下のような因縁が語り明かされる舞台であるからだ。高志は革命運動の中でスパイの嫌疑を掛けられた「旋盤工」を同志達と査問した上、小舟からの溺死を装う形で殺害してしまう。その実行を任されたのがやはり同志の「一角犀」であり、彼はその後高志の恋人である節子の暮らす部屋に他ならぬ高志の導きのもと潜伏・同棲し、結局二人は心中を遂げることとなる。心中に至った本当の理由は謎のままであり、与志は直接兄に次のように問い尋ねる。

——何故、「あのひと」は死んだのです？

依然として目を閉じたままの兄から、すると、思いがけぬ言葉が洩れでたのであつた。

——俺が、子供の存在を容認しなかつたからだ。

「そう苛らだたしげに短くいつた」高志は続けて「俺達が自らだけから発した意志、真正正銘の自由意志でおこなえることがこの人生に二つあるが、お前はそれがなんだと思うかね」と弟に問い掛ける。その一つを正しく「自殺」と応えるものの、残りの一つに想到

しない意志に向けて明かされるのが即ち次の秘密であった——「それは子供をつくらぬことなのだ……」と。高志に扱れば「自己への固執」と共に「人間の過誤の歴史」を「長く長く支えてきたもの」こそ自らの「自由意志の重さについて思い及ぶこともないままに一生振舞つたあげくほんやりと子供をつくつてしまうこと」に他ならなかった。ベネターもまた「自分が子どもを作るべきか否かなど考えもしない」で「ただ単に子どもを作」ってしまふことの「害悪」を嘆息しているが、高志のいう「人間の過誤の生産と再生産の怖ろしいほどほんやり長くつづいてきた取戻しがたい無自覚」と共鳴し合う認識であるに違いない。ところで、兄弟の遣り取りは更に続く。

——ほう、私達の過誤の第二が、子供をつくることにあるのですつて……？

——そうだ。「俺の子供」——これが俺達の第二の重い躰きの石だ。いつたい、俺達がひとびとの胸奥で必ずはげしくさらわれ彼等の広い席に容れられなくなるのは、彼等のどの痛みの部分に触れた場合だと思ふかね。それは、いいかね、敢えて口にだしていえば、《子供の生産》に対する容赦もない、なんら手心も加えぬきつぱりした全否定の言葉を発したときに限るのだよ。

「《子供の生産》」を「全否定」することが「彼等」の激しい怨嗟

を買うのは、それが自らを含むところの社会・国家の再生産（持続可能性）に対する叛逆だと受け止められるからだろう。「子供を生むこと」は単に一对の男女による私的で個人的な営みなのではない。高志はまさしく「《子供の生産》」を権力統治の要として繰り込む政治を撃つべき標的として見据えており、その「全否定」を通して極めてアナキスティック——あらゆる生産を停止するゼネストの如き——な現行秩序の「全否定」を画策しているのだ。こうして三輪高志の〈反出生主義〉が闡明される訳だが、恋人である節子は高志のその思想によって自死を選ぶことになったと意味付け——少なくとも高志の主観的な語りの中では——られることに注意しよう。それが何故高志ではない男との心中という形を取ったのかについては依然として謎のままであり、節子が高志の子供を妊娠した上で「子供の存在を容認しな」い高志によって墮胎させられたのか、あるいはそもそも妊娠することそのものを拒絶されたのかもテキストの内部からは謎のままだ。当然湧き上がる疑問を与志もまた兄に投げ掛けている——「兄さんの子供がもてないだけで、何故、「あのひと」は死ななければならなかったのでしょうか？」と。高志は打ち明けないのなら、逆に、俺のなかへ彼女自身を孕ませてしまわねばならない……」。

かくして高志の「暗い記憶の箱にいやおうなくはいりこんで、永

劫に忘れられず、日がたてばたつほど大きくなつてゆく何かになつたとされる節子の死の「方程式」も、高志のナルシステックな主観に基づいて仮構された死者の内面の驕りに過ぎないという解釈も出来るだろう。最終の九章《虚体》論——大宇宙の夢の中にある、与志の婚約者である津田安寿子が発する科白——「私がやつといま解つたのは、三輪家のひとびとが、高志兄さんも、首さんも、そして恐らく矢場さんも、また、その心の暗い奥も解らぬ与志さんも、その最初から最後まで、すべて、「男」そのものにはかならぬという怖ろしい事柄です」——に顕著なように、『死霊』には男性の《反出生主義》に対して女性側がその観念性に異を唱えるという基本的な構図があり、そのことは尾木節子の妹である恒子の職業が「託児所」の「保姆」に設定され、与志との間に「赤ん坊」をめぐるの長い議論が交わされる場面（四章）からも何うことが出来る。かかる『死霊』のジェンダー編成は後に触れることになるが、さしあたりはまず、高志における《反出生主義》の理路を最後まで辿っておこう。

高志が「子供の存在を容認しな」いこと理由はまず何よりもそれが『革命』にとつての「躰きの石」になり得ることに求められる。子供は「目的なき目的」として謂わば白紙の如き状態で生まれてくるけれども、「成長して物心ついた子供達」は次第に「この親のように決してなるまい」という単純な決意を懐き始める。「親

〈子供〉を生むこと

のたてた崇高な伽藍のヴィジョン」は決して「子供にうけつがれず、従って「子供が生れば生れるほどそれだけ窮極の樂園のヴィジョンから遠ざかつてゆく」のであり、「革命の過誤と墮落のまぎれもない第一原因は革命家が子供をもつことによつてまず起る」というのが、高志に《反出生主義》を包懐せしめるところの原理に他ならなかった。「とすると、兄さんのいう革命は果たして誰によつてなしとげられるのでしょうか？」という与志の問いに高志はこう応える——「自分だけで……」と。冒頭のアンケートで「好きな動物は？」と問われた埴谷の回答「単性生殖するもの」はこの「自分だけで」に接続されるモチーフに違いなく、男女両性による《生殖》の拒否と「単性生殖」に対する偏愛は対となって『死霊』のみならず埴谷の言説の至る所に遍在している⁷⁾。

たとえば三輪高志が肅清されゆく「旋盤工」に向けて「あらゆる真の革命家は《瞬間だけ》の革命家にしかなれないのだ」と断じる時、事後的に追認するしかない親・子という生命の連続性への忌避と同時に、「人間の過誤の歴史」という連続する時間性の中で一瞬間の点としてのみある自己の単独者性こそが語られているのだろう。「旋盤工」も「最初の読者」の裡の一人であり、尾木恒子も「幾度も幾度も繰り返して読み返したという高志の手になるリーフレット『自分だけでおこなう革命』（八章）『月光のなかで』に挿入）には、彼の《反出生主義》に賭けられたあまりに法外な射程が次の

五

ような驚くべきヴィジョンの裡に開示されている。「生に「無反省」「無自覚」なまま、子供を産んだものは、すべて、愚かな自己擁護者」であって、「自他ともに顛覆し、創造する革命者たり得ない」としてそれは始まる――。

ただ「自覚的」に子供をもたぬもののみが、「有から有を産む」愚かな慣例を全顛覆し、はじめてまったく自己遺伝と自然淘汰によつてではなく、「有の嘗て見知らぬ新しい未知の虚在を創造」する。／生の全歴史は、子供をもたなかったものの創造のみによつて、あやうくも生と死の卑小な歴史を超えた新しい存在史の予覚をこそもたらし得たのである。／従つて、この命題を厳密且至当に辿りゆけば、ひとりの子供だにまったく存しなくなつた人類死滅に際しておこなわれる革命のみが、本来の純粹革命となる。子供をのこしてきたこれまでのすべての「非革命的」革命なるものを顛覆する純粹革命こそ、これまで絶対にあり得なかつた不思議な知的存在者をついに創造し得た唯一の栄光をもつた最後窮極の革命にほかならない。

〈反出生主義〉を完遂した末に「人類死滅」に到ること――再生産の全停止を志向するこの主義を極限まで推し進めていけば当然の帰結であるに違いない。ベネターもまた「絶滅しないせいで始まつてしまつたらう今はまだない人生における深刻な害悪が生じずすむ」のであれば「もうこれ以上人間が（そして実際のところはこれ

以上意識を持つ生命も）必要ないのならば、総合的に見て、人間は、絶滅した方が良い」として「段階的絶滅」を推奨しているけれども、その絶滅に際して「有の嘗て見知らぬ新しい未知の虚在」としての「不思議な知的存在者」が「創造」されるというヴィジョンにこそ、ベネターと峻別すべき高志の思考の特異性が存するだろう。ここで確認しておけば、高志の〈反出生主義〉はリーフレットにあるように「自己遺伝と自然淘汰」による生命の連続を意志的に拒絶すると同時に、生まれるべき生とそうでない生を人間が恣意的に線引きする類の社会ダーウィニズム（優生思想）をも拒絶するものだ。彼は特定の「人類」の「死滅」を志向しているのではなく、「人類」そのものの全的「死滅」をこそ志向しているのであり、「顛覆」の標的とされているのは「人類」をその点景として裡に含むところの全「存在」に他ならない。「自覚的」に子供をもたぬもの」のみによつて齎される「純粹革命」即ち「生と死の卑小な歴史を超えた新しい存在史」を構想するリーフレット『自分だけでおこなう革命』を瞥見する時、人間存在に限定された「社会革命」を遙かに超えて「未知の虚在」としての〈不思議な知的存在者〉の「創造」を目論むプログラム、即ち「最後窮極」の「存在の革命」に果たすべき〈反出生主義〉の法外な役割に人は戦くに違いない。

3 〈出生〉を弾劾する胎児

前章では存在を生み出す側からの〈反出生主義〉を三輪高志の思想を元に検討した。この章ではその関係性を転倒し、反対側の視線から捉え返してみたい。反対側といってもそれは本来不可能な視線だ。ベネターは言う——「相手のためになる何らかの利益を確保するという目的で私たちが害悪をもたらす正当性を、存在している人々は往々にして認めることがある。がしかし、私たちが存在させようとしている人々が生み出される前に彼らの承諾を得ることは私たちに絶対不可能なのである」と。言い換えれば当事者のインフォームドコンセントを得ること無しに、「苦痛」に満ちたこの世界に強制的に放り出されるのが〈子供〉であり、そのような暴力をあえてするのが〈親〉である、とベネターは言うのだろう。意識の発生をどの時点に置くかという難問を踏まえずとも、確かに現実には胎児に〈出生〉の「承諾を得ること」は「絶対不可能」に違いない。とはいえ、文学という虚構形式の中でその「不可能」を表象してみせた幾つかのテキストを我々は提示することが出来る。

たとえば、サミュエル・バトラーの『エレホン』⁹（一八七二）は反ユートピア文学の先駆として知られているが、その十九章には「純粹に魂で、実体が無く、幽霊のそのやうな、一種のワス体のやう

〈子供〉を生むこと

な」存在としての「未生児」(the Unborn)の世界が描かれる。エレホン国の「未生児」は「極端な幸運も不運も無」く「詩人が人間の原始状態として空想したそれにいと好く似た状態の中に生活」しており、そのままであれば「死ぬこと」もないのだから「彼等は極めて幸福な者」である筈だ。にもかかわらず「体を持たぬ存在の退屈さに堪へかねて、何でもいから変化を来たす」ことを望み、「起請文に署名」した上で「未生児の世界」を去り「人間の世界」に出るといふ愚行を犯す者もいる。その行為こそが〈出生〉であり、それは「未生児の世界」から見れば「彼等のその時の存在」を意志的に辞める「自殺」に他ならない。そのような者達に予め聴かせる「説教」は次のようなものだ。

「生れるといふことは、」と彼等は言ふ、「一つの重罪である、——それを犯さば直ちに宣告を執行すべき、極刑に当る罪である。お前は或は七十年乃至八十年は生さられるかもしれないが、お前が現在享けてゐる永世に較ぶれば、それが何だ？

バトラーに拠れば、未生児（非存在）である限りそこに苦痛はなく、同時に快樂もないかも知れないが、出生（存在）することによって生じる無数の苦痛——たとえば「愚かな親」の元に生まれることによつて被る「害悪」の数々——を避けられるのだから、「生れるといふこと」は「一つの重罪」なのだ、と。これはベネターの〈反出生主義〉に極めて近似した観点だろう。特にバトラーが「人類の

間に歓楽のあることを否定するのではない。細々した満足らしいものがあるし、非常な幸福と考へらるるものもある」と認めた上で、にもかかわらず「未生児の世界」（非存在）の優位性を立証していく理路は、「存在することに内在的な快楽があったとしても、決して存在しないことに勝るような純粋な利益を構成しはしない」というベネターに近い。とりわけ『エレホン』の次のような一節は（反出生主義）の核心を射貫いて印象的だろう——「若し人間が過去を変更して、全然生れてこなかったことにすることが出来たとしたら、彼は非常に喜んでさうしないとお前は考へるか？」。

ところで、その『エレホン』からの強い影響を指摘されるのが芥川龍之介の「河童」（『改造』昭和2・3）である。河童の世界では出産の際、「父親は電話でもかけるやうに母親の生殖器に口をつけ、「お前は、この世界へ、生れて来るかどうか、よく考へた上で返事をしろ。」と尋ねる仕組みになっているのだが、漁師の「バツグ」が「細君の腹の中の子」に尋ねると次のような「返事」が聞こえてくる——「僕は生れたくはありません。第一僕のお父さんの遺伝は精神病だけでも大へんです。その上僕は河童的存在を悪いと信じていますから」。こうして胎児の意志を確認すると、「産婆」が「忽ち細君の生殖器へ太い硝子の管を突きこみ、何か液体を注射」して「今まで大きかつた腹は水素瓦斯を抜いた風船のやうにへたへたと縮んでしま」うというのが河童の世界の（出生）システムであった。

「僕は生れたくはありません」と（反出生）を意志表示する胎児の存在は「私たちが存在させようとしている人々が生み出される前に彼らの承諾を得ることは私たちには絶対に不可能」とするベネターの前提に、反ユートピア文学という形式の中で真つ向から挑戦するものだろう。逆に言えば、バトラーにせよ、芥川にせよ、「絶対に不可能」などをあえて思考実験せずにはいられないほど、それほどこまでに（出生）という出来事に内在する不条理に憑かれていたのかもしれない。^⑪ ザミヤーチンの『われら』（一九二二）やオルダス・ハクスリー『すばらしい新世界』（一九三二）など反ユートピア文学——（胎児）という点ではそこに埴谷も高く評価する夢野久作『ドグラ・マグラ』^⑫（一九三五）を加えても良いだろう——は未来の新世界にあり得べき（生殖）のイメージを必ずその内部に仮構しているが、さて埴谷の『死霊』は如何なる点でかかる系譜に連なる資格を有することになるのだろうか。

ここで参照したいのは『死霊』七章「最後の審判」である。この章には「正妻以外の（哀れな女達）の子である矢場もこの僕もこの世のありとあらゆる極端酷薄な屈辱と苦難」の中で「育つてゆかねばならなかつた」と首猛夫が三輪家の秘密を吐露する一幕があり、彼が矢場徹吾の「異母兄弟」で同じく三輪広志を父に持つ「すぐ上の兄」であることが明かされる。こうした（出生）の事情が「母親の胎内」から「生れたこと」を「屈辱感なし」に「認容し得」ない

という先に見た首猛夫の言葉に暗い影を落としている可能性も否定できない訳だが、注目してみたいのは「重い眠り」の中に何時しか落ち込んでしまったその首猛夫の夢の中に矢場徹吾が登場し、彼を「黙狂」へと至らしめたところの「決して考えてはならず、また、決していつてはならぬこと」即ち「この全宇宙のすべてへ向つての最後の最後の審判」を矢場自身が語り出す、あまりに長大なその告白に他ならない。

「最後の最後の審判」は「無限に《死》をおさめつづけることのできる巨大な容器の宇宙」としての「影の影の影の国」における「存在の約束から離れてしまった亡霊である亡者達」によって為される。それはまず「食われた亡者が食つた亡者をついに見つけて弾劾する」という形式で「この生と存在の必自然的な自然のかたち」を装う「食物連鎖」の「狡猾絶妙な罟」を組上に載せ、「食つて食つて食いつくす人間の代表」として、まず隣人愛を説きながらそこに人間以外の「生物」を含めることなく「ガリラヤ湖」の「魚」を食つたイエスが、次に不殺生を説きながらそこに植物を含めず「チーナカ豆」を食つた釈迦が召喚され、彼等の犯した「原罪」が食われた当事者達によって順次弾劾されていく。「最後の最後の審判」の一方の柱を担うのがこの「食物連鎖」による「生物殺し」であり、その連鎖の頂点に君臨する人間存在であることは間違いない。人間を弾劾するのは動物・植物ばかりか釈迦が涅槃に入る際に呼吸された「大気

の精」にまで及んでおり、人間／動物／植物／鉱物という位階序列ヒエラルキーを形成する《人間中心主義》を根底から「顛覆」することによって「存在の革命」へ向かう、あまりに壮大な『死霊』のプログラムをここに確認することが出来るだろう。そしてそれを駆動するもう一つの柱が他ならぬ《生殖》に纏わるそれなのだ。

「食われる悲哀、食う悲哀、食わざるを得ぬ悲哀」が語られた後に「その種の悲哀とはまったく違つた種類」の「悲哀」を開示する者は誰であろう、「胎児」である。「ぼくは、母親の胎内にはじめからしまいまでいるのだから、一応、胎児といえるだろうけど、ほんともつと正確にいつてみれば、「生の前の生」というわけさ」とそれは語り始める。不毛の荒野での一ヶ月近くに及ぶ極限の飢餓の中で「それなのに、そのおやじと母親」は「このぼくをつくつてしま」い、餓死してゆくその母親の胎内で「何も食わない」で死んでいった「胎児のぼく」に言わせれば、「真の深い悲哀」は「生が生としてまさにはじまつたとき、つまり、母親の胎内で何やらが胎児になつてしまつたときにこそある」として、胎児は次のような「審判」を繰り広げるのだ。

こういう恥ずかしさの底の底もない深い悲哀をほかならぬ彼等の胎児に味わわせるところの「子供づくり」こそ、生そのもの、のなかのまぎれもない、「原罪」だと思ふよ。こうした「ぼく」達の深い悲哀をよそにして、この「子供づくり」の盲目的

連続を無自覚につづけ、盲目的罪悪をこの世につくりつづけて
いる父親と母親をほくこそが裁くことができるんだな。父親裁
きはこのほくこそができるんだぜ。

「食物連鎖」の「原罪」に照らせば、飢餓状態にある母親の胎内
で他のものを何も食うことなく僅かの間その生を繋いだに過ぎない
胎児は無垢であり、イエスに食われた魚も、釈迦に食われたチーナ
カ豆も、この胎児を弾効の対象とすることは出来ない筈だ。そして
「死んだおふくろの暗い胎内」で「もはや悲哀などといえぬ薄暗い、
底もない悲哀を味わった」その無垢なる胎児は、自らにそのような
苦痛を強いた「子供づくり」(生殖)をこそ、「原罪」として「最後
の最後の審判」に付すのである。「お前はまったく無責任に自分だ
けの気分でぼくをつくっておきながら、恥ずかしさの底の底の底も
ない暗い悲哀につつまれて軀を縮めに縮めて蹲っているこのぼくの
ことなどまったく思い及びもせず、勝手に、自分だけ飢えに飢え
た果て死んでしまった」と「父親裁き」——ここで裁きのバイアス
は明確に父親(男性)に傾いている——を繰り広げる胎児のこの糾
弾は、当人の「承諾」とは無縁に否応なく〈出生〉させられること
に潜在する不当な暴力性Ⅱ「原罪」を、生物が「食物連鎖」という
形で犯す「原罪」から更に遡行する形で問う根源的なものと思える。
だが繰り返すがこれは「不可能」な問いである。胎児は胎児であ
る限り決してこのような審判を為し得ないのであり、それは〈出生〉

に纏わる拭い難いデッドロックに違いない。夢と想像力を駆使して
「未知への凄まじい飛翔を敢えて試み」る「不可能性の作家」⁽¹⁵⁾とし
て自らを位置付ける埴谷は、あえてその「不可能」な試みをこの七
章に仮構——それが首猛夫の夢の中に現れた矢場徹吾の語りによっ
て伝えられることは重要だろう——した訳だが、その仮構を、決し
て代理表象できない筈の者の内面を騙る欺瞞として批判することも
出来るかもしれない。しかしこのような形で、〈出生〉を弾効する
胎児という生まれ落とされる側からの〈反出生主義〉を目撃する時、
倫理的なりミットを超えて「不可能」の向こう側へ踏み越えてしま
う禁忌を少なからぬ作家が繰り返し犯してしまうこと自体に潜む反
覆強迫的な欲動を認めざるを得ないのもまた事実だ。

松本健一が埴谷へのインタビュー⁽¹⁷⁾の中で、芥川の「河童」におけ
る例の出産の場面を紹介した上で「そういう存在への問いは七〇年、
八〇年たつてもあまり変わっていない」と埴谷に語りかけていて興
味深いのだが、埴谷自身もまた「生誕について」⁽¹⁸⁾の中で自らが繰り
返し胎児に焦点化する理由を次のように語っている——「胎内瞑
想」の十箇月の中で「条件反射」と「自然淘汰」のなかへ絶え
ず投げこまれていく胎児の内部に、ここで強調していつてみれば、
それらすべてにことごとく反対しようとするところの巨大な「異議
申立て」の端緒もまた置かれつづけ」ているのだと。〈出生〉を弾
効する胎児のモチーフは、〈出生〉してからでは既に取り戻しよ

うもなく絡め取られてしまう「必然」という名の「存在の畏」への「異議申立て」として、論理的に不可能であるにもかかわらず、いや論理的に不可能であるからこそ、背理そのものとして『死霊』の内奥に装填された奇妙なデッドロックであるに違いない。

4 〈赤ん坊〉の泣き声

前章で、「子供づくり」の「原罪」に向けられた胎児による審判は「食物連鎖」のそれよりも根源的に見える、と書いた。だがそれはまだ仮初めのものに過ぎず、胎児が語り終えるや否や「ひとつの淡い影がぼんやりと」浮かび上がり、無垢であるかに見える胎児自身に潜む「原罪」について次のように語り始めるのだ。

おお、いいかな、胎児よ、そのお前がようやくそのお前自身としてそこにあるのは、四、五億ものぼるお前自身の兄弟殺しの凄まじい結果の上のみにたつているのだ。よく考えてもみる。お前が目に見えぬマラソン競走のゴールである母親の胎内の弾力に充ちみちた壁の傍らの卵子に最初に辿りついたとき、お前のすぐ横には四、五億の兄弟達が尽きせぬ盲目の祝祭のごとくに轟きあつていたので、いいかな、お前のお前自身としての自己確立こそ、お前のまきれもない兄弟である四、五億の可能性の胎児達に対する一斉の大殺戮の開始にほかならなか

つたのだ。

こうして胎児自体も「原罪」のなかにおける最も初源の「兄弟皆殺し」の「原罪」からは免れないとされる。ここまで容赦なく「原罪」を徹底させるとするならば、行き着く先はやはり〈絶滅〉以外にはあり得ないだろう。「マラソン競走」の比喩に見られるように、勝者として顕在化された存在と未出現に留まった無数の敗者（非存在）という構図を描き、淘汰された後者の側から「現存宇宙」の責任を問うこうしたロジックは『死霊』の至る所に見出されるものだ。「俺は俺だと荒々しく云い切りたいのだ、そして、云い切つてしまえば、この責め苦。」（二章『《死の理論》』）という「自同律の不快」にしても、「俺」という実体の「自己確立」（同一性）の背後に〈生殖〉におけるが如き夥しい可能性の「兄弟殺し」が潜在しており、その「原罪」を背負いつつ今ここに個体として現働化しているこの「俺」が、未出現に留まった無数のあり得たかもしれない可能性の住まう「亡霊宇宙」から絶えざる「責め苦」を被るることによって、その「自同律」を激しく揺さぶられているのだ、と捉えることもできよう。『死霊』にはヴァーチャルなものの存在論とでも呼ぶ他ない位相があり、亡霊も死霊も、決して〈出生〉することのなかった精子も胎児もまた、かかる位相において絶えず顕在化した存在を責め苛みつつこの宇宙の過誤に容赦ない審判を下し続けるのだ。

ところで「兄弟殺し」を行う「生殖細胞」もまた「原罪」を背負

うのだとして、それを更に遡ったところに見出されるものは何だろうか。『死霊』九章には「はじめのはじめのはじめの単細胞」が登場し、「長い長い生物史のはじめの原始の単細胞が、そのままそこに停つてしまつた理由は、やがておこなわざるを得ぬ兄弟殺しをも、その後の全生物殺しをも、すべて、いさぎよしとせぬためで、そのはじめのはじめのはじめに停つたまゝいまも停つております」と語る場面がある。即ち、性であれ食であれ「外界」から何かを盲目的にとりいれ」ることで「自己欺瞞へ向つて踏み出」すことを拒絶するが故に自らは「単細胞」に留まるといふのだ。

E・M・シオランは〈反出生主義〉の古典といつてよい『生誕の災厄』⁽²⁰⁾の中で「時間がまだ存在していない一時期というものがあつた」として「生誕を拒否するとは、時間以前のこの時期に対する郷愁以外のものではない」と述べているが、個体にとつての郷愁が胎内回帰であるとするならば、人類にとつてのそれは両性へ分化する以前の揺籃期としての「単細胞」への回帰ということになるか。「単細胞」のイメージは既に五章・六章に登場するが、とりわけ六章「『愁いの王』」の中で、娘の婚約者である三輪与志を案じる津田夫人に対し、黒川建吉が「男と女の成立以前」の「はじめのはじめ」に「立ちどま」つて「まつたく孤独に考える単細胞、それがほかならぬ三輪の位置です」と解説することは重要だろう。与志は「単細胞」の如く「自分自身だけによる唯一無二の自己増殖」を志向することで

「全存在への反抗と拒否を敢えて唯一の自己課題」としてしまったのだ、と。

三輪与志は「男と女の成立以前」で「まつたく孤独に考える単細胞」であり、三輪高志は「《子供の生産》」を「全否定」し、首猛夫は「母親の胎内」から「生れたこと」を「決して認容」せず、矢場徹吾は〈出生〉を弾劾する胎児について夢の中で語る——日常的次元からみればあまりに奇妙という他ないこの四兄弟が繰り広げる世界は、男女両性による〈生殖〉に頑なに背を向ける〈反出生主義〉のディストピアそのものなかもしれない。そのことを認めた上で、敢えて四兄弟の語りの裡にポリフォニックな差異を読み込み、⁽²¹⁾単線的なニヒリズムに収斂することのない、ディストピアがその極限において反転するような一瞬を垣間見ることは可能だろうか。そこでまず着目してみたのは「赤ん坊」に対する三輪与志の極めて複雑で両義的なその態度に他ならない。四章において、尾木節子がかつて住み、今は妹の恒子の暮らす部屋を訪ねた三輪与志は、「幾つもの壁をへだてた廊下のその遠い奥」に「誰かに訴えるような、物悲しい赤ん坊の泣き声」を聞く。「保姆」である恒子が「思わず足を踏みだしかける」と与志は「それを抑えるふうに片手を素早く延ばし」てこう言うのだ——「いけない。味わせるのをとめてはいけない……」と。「何故……赤ちゃん泣くのをとめては、いけないんですの？」と問う恒子に与志は次のように応答する。

——それが……唯一の起動力だから……。

そう三輪与志は長く隠していた何かでもないやいや押しだすように呟いた。

——起動力ですつて？

——そう……。

——それは……なんの起動力ですか？

——自身を揺り動かしてみる起動力……。

「赤ちゃんは、何故泣くのでしょうか？」と問い、「まず……淋しいのですわ」と自ら答えつつ、空腹や「おむつ」といった経験的次元の理由を並べ立てていく恒子に対して与志は、それらは全て「陋劣です」と即座に突き放してみせる。「指をしゃぶつて泣いている赤ん坊は、同じ感触、同じ手つき、同じあやし声でおむつを換えられ、抱きあげられ、そして、この世の陋劣に慣らされてしまう」のである。「欲望」が満たされ「笑っている赤ん坊たちのちつちやな愉悅した自足の顔を見るだけで、それがやがて大人になつた社会の凄まじい傲然たる姿がはつきり解る」が故に、その「泣き声」を「とめてはいけない」のだと。

四章のこの場面のリアリティは、与志の奇矯な論理に対して「私は毎日赤ちゃんを扱つてるのですから」として一見素朴な抗弁を続ける「保姆」としての恒子の存在が、自らの姉を高志の〈反出生主義〉によって亡くした背景と相俟って、「男」達のあまりに観念的

な議論を空疎なものとして斥けるに足るだけの見事な厚味を有していることに支えられている。⁽²⁾ただし、高志の〈反出生主義〉と「赤ん坊」をめぐる与志の議論を一緒くたにすることはむろん出来ないだろう。「すると……与志さんは、泣かせつづけるのでしょうか、もし私が赤ちゃんを無理に手渡したら？」と問う恒子に対して与志は「おお、思いがえてはいけません。僕は赤ん坊をきらつている人ではないんです」と応答するのであり、再び「何故」と問う恒子に「それが唯一の起動力だから」と念を押す与志の中にはおそらく高志的な意味での〈反出生主義〉は無い。そのことは既にみた五章の中で高志の〈反出生主義〉を聞き届けた与志が「兄さんが……そして、ひよつとしたらばくまでも子供をもてない理由はかなりの程度解りましたよ」と語る場面からも了解される筈だ。与志は先験的に確信として〈反出生主義〉を懐いている訳ではなく、そればかりか、赤ん坊を「自身を揺り動かしてみる」「唯一の起動力」として、「自律の不快」が源初的に展開され、それを「存在の革命」へと転化させ得る「唯一」の逆説的な場として特権的に措定していることを見逃してはならない。

たとえば八章の中に「与志さんも、三輪家のひとり、ですから、人類史拒否といつた子供嫌い、ですけれど、昨夜は、赤ちゃんを、このベンチの上で、抱きあげましたわ、安寿子さん。」と尾木恒子が「低く囁き」かける場面がある。それを耳にした津田安寿子は「え、

与志さんが赤ちゃんを昨夜抱いたのですつて……？」と「不意に忽然と目覚めたよう」に「声高く訊き返」すのだが、その「昨夜」の出来事こそ、「赤ん坊」の泣き声をめぐつて与志と恒子の間に交わされた長い対話を経て、恒子の部屋を後にする際に不意に出来たそれに他ならない。二人の会話の途切れた時、「遠い建物の何処かの隅から、嗚びあげるような尾をひいて赤ん坊のきれぎれに訴える物悲しい泣き声が聞え」と、恒子はその「赤ん坊」の元へ向かうべく「薄暗い廊下へ出て行」く。やがて恒子の部屋を後にした与志が階下へ降りて行くと、「扉があけはなたれ」た「部屋の闕の上に、まだ誕生前らしい肥つた赤ん坊を目の前に差しあげて、宙へ弾ませながら力をこめて揺すつている」恒子の姿を発見する。彼女は「赤ん坊」を抱えたまま「三輪与志を送つてゆくふう」に、薄暗い廊下へ歩きだし、やがて「中庭」のような「空地」に抜けると、そこにある「孤独な木製のベンチの一方のはしへ腰かけ」る。「すると、そのとき、尾木恒子の膝の上のいた筈の赤ん坊」がベンチの反対側の「三輪与志の方へ這つてきはじめ」、凶らずも与志は「赤ん坊の弾力をもつた上体が膝先からのめりかけるのをはじめて受けとめること」になる。⁽²³⁾「片方の頬へ軟らかな馴れきつた指先をかけて膝の上から弾みあがる赤ん坊を正面に抱きかかえた」まま与志は「ゆつくり立ち上」がり、恒子はこの建物の外へ出ることのできる「柵の横木をこちら側へ向けて開」くだろう――。

弾んだ赤ん坊の声とともに三輪与志の淡い影が柵の向う側へでると、尾木恒子はまた柵の重たげな横木を動かしてそこをゆつくりと閉めた。胸許に達するほど高い柵のこちら側と向う側に立つていた彼等のなかから、黙つたまま尾木恒子が両腕をさしだすと、薄暗い何処かへぼんやりと真横に長くのびた柵の上を、弾みあがる赤ん坊の声が、他の世界からの架橋でも跨ぐように、ゆつくり渡つた。

何故「赤ん坊」は外部に出る柵の手前で恒子へ手渡されることなく「抱きかかえ」られたまま与志と共に「向う側」へと柵を越え、何故あえてその「柵の上」から「こちら側」の恒子に手渡されねばならなかったのか？ 与志によるその一連の動作の裡に、「他の世界からの架橋」ともなり得る「赤ん坊」に託された「起動力」という名の可能性⁽²⁴⁾を垣間見る時、高志的な〈反出生主義〉と決して同一化する事の出来ないポリフォニックな差異が浮上するに違いない。ただし、それは〈子供〉の再生産に未来の希望を託すが如き〈ヒューマニズム〉とはまるで相容れないものだろう。たとえば与志が「男と女の成立以前」の「はじめのはじめ」に「立ちどまり」まったく孤独に考える単細胞」であり続ける限り、安寿子との未来に〈生殖〉の可能性を想像することはやはり出来ない。長い対話の最後に発された「それは、何時、泣きやむのでしょうか？」という恒子の問いに対して与志は「自身でなくなつたふうになれば……」（傍

点原文」と応えるのであり、それを聴き「不意と絶望的な溜息」と共に恒子から「洩れ」出る次の科白が、あまりに雄弁なその証左となるだろう——「ああ、安寿子さんをどうするんですの？ 与志さん！」。

5 『死霊』のクイアネス

〈反出生主義〉を鍵として『死霊』を捉え返す時、そこに浮上するのは如何なる可能性なのだろうか。一九九二年に行われた立花隆と埴谷との対談⁽²⁵⁾において、「『死霊』の中で、単細胞生物がメス・オスに分かれたときから墮落が始まったんだと述べてますね」と立花が述べると、話柄は現在の生殖テクノロジーの発展に及び、いずれ「女」の「お腹を借りなくてもちゃんと子供が出来るようになりますよ」と埴谷が予測する過程で次のような対話が交わされる。

立花 技術的には出来ます。クローニングでつくれますからね。そうすると女はいらない、単性生殖で。

埴谷 単性生殖で完全に出来るようになる。そうすると、ほくの言う生と存在の革命はものすごいことになっちゃいます。食物と生の問題が解決したら、人間は超人間になれますね。

埴谷が無邪気に「単性生殖」のユートピアを語ると、立花は的確に「単性だと結局は自己複製を続けるだけで、生命の多様性はなく

なっちゃいますね。たまにミューテーションが起こるというだけで……」と当然の異論を投げ掛けるのだが、それでも「ミューテーションの連続ということがある」と埴谷は頑強に主張し、「自然淘汰的」ではない「自己が決定するミューテーション」によって「超人」が「超神」になるような「生と存在の革命」は可能だと強弁していく。だが、有性生殖における遺伝子の組み換えによって生じる「生命の多様性」⁽²⁶⁾をあえて犠牲にしてまで「単性生殖」に拘泥する先に果たして何が待っているというのか。

「男と女、と、雄と雌」⁽²⁸⁾と題されたエッセイの中で埴谷は「困ったことに数億年もの「進化」とやらを果たしたのちにも、「たった二つしかない性」という与えられた枠をいまだになお越えられない私達の生すべての哀歎と愚劣」と記しているけれども、『死霊』のアクチュアリテイの一つの方向性はおそらく〈出生〉と結託した〈異性愛中心主義〉のイデオロギー性を〈反出生主義〉と「単性生殖」のイメージによって攪乱してみせるそのクイアネス (queerness) に賭けられていると言つてよい。たとえば、リー・エーデルマンは一九九八年——埴谷の死の翌年——の論文「未来は子ども騙し」⁽²⁹⁾の中で、「社会的秩序の目的を具体化し、その秩序を永続的に維持する比喩」として「歴史的に構築」された「〈子ども〉」という「形象」に「クイア理論」の立場から着目することで、ベネターの〈反出生主義〉に接続可能な議論を展開している。「〈子ども〉」を再生産し

なければ「未来を考えることができない」といった脅迫によって「出産奨励策を絶え間なく駆り立てる」政治を相手取り、かかる「再生産的未來主義」(reproductive futurism) に対抗するべく「クイア理論」は「未来の再生産への基盤的な信仰を破裂させること」によって国家秩序を再定義する」のだとして、エーデルマンはまた次のように述べている。

私たちは中絶の支持者である。未来の比喩としての、〈子ども〉は死ななければならない。私たちは未来というものを知った、それは過去と寸分変わらず致命的なものだ。そしてしたがって、私たちに關してもっともクイアなもの、私たちの内部でもっともクイアなもの、私たちにもかかわらずもっともクイアなものとは自動詞的に主張する意志、すなわち、未来はここで終わる、(the future stops here) と主張する意志である、と。

「子ども」のカルトとそれが支える政治的文化」に対抗して、「私たちは新しい政治、より良い社会、明るい未来を求めてはいないのだと主張」し、「象徴的な未来への同一化の結びつきとしての〈子ども〉を選ばないことを選択」するのだとエーデルマンは言う。なぜなら「これらの幻想は未来の形態で過去を再生産し、未来そのものを単なる再生産の一形態として構築」してしまうからだ。 「人間の過誤の生産と再生産の怖ろしいほどぼんやり長くつづいてきた取戻しがたい無自覚」を糾弾し、過去から未来へと反覆される「過

誤の歴史」の連続性を切断するべく「真の革命家は《瞬間だけ》の革命家にしかなければならない」と言い放った高志の〈反出生主義〉が想起されるだろう。高志の言葉にあるように『子供の生産』に対する容赦もない「全否定の言葉」を発する「クイアなもの」は決して「彼等の広い席に容れられな」いことは自明だ。にもかかわらず、いや、であるからこそ「彼等」の「再生産的未來主義」を逆撫でするかのように「クイアなもの」(高志)は言うだろう——「ひとりの子供だにまつたく存しなくなつた人類死滅に際しておこなわれる革命のみが、本来の純粹革命となる」のだと。「未来はここで終わる」(エーデルマン)と断固として「主張する」「クイア」な「意志」が確かにここにある。

「過誤の宇宙史」を継続させない為に「単細胞」に留まるという「クイアなもの」(与志)を婚約者としてしまった津田安寿子が発する「男と女が、何故あるのでしょうか」という痛切な叫びに、やはり「クイアなもの」の一人である首猛夫は躊躇いもなく応えるだろう——「男と女、それがそこにそうしてあること、それは、まつたくこの宇宙最高の愚劣だ！」と。即ち「存在の最後窮極の秘密に难道考え及ばぬよう」にその両性は「自然の刑罰」として、原始の単細胞のなから、ついに、ついに、つくりだ「されてしまったに過ぎないのだと。エーデルマンの言うように「社会的主体を再生産するためにアイデンティティと未来とを婚姻させる」政治に巧妙に

動員されるのが「子ども」という形象なのだとしたら、それに亀裂を走らせるべく「クイアなもの」の倒錯的な力を解放し、現存秩序の顛覆へ向けて「反出生主義」を縦横に炸裂させる以外あるまい。「死霊」には主体の安定性を支える「自同律」を「不快」として攪乱することと「子供」の「生殖再生産」に媒介された社会秩序の「自同律」を「反出生主義」によって攪乱することとが高度に連動する形で「クイア」な、あまりに「クイア」な四兄弟によってポリフォニックに展開されており、「反出生主義」を通して『死霊』を読み直すことのアクチュアリティもまた、そのクイアネスの強度に賭けられているに違いない。^(註) 埴谷は何度でも応えるだろう。「あなたが寛大になれない過ちは？」——「子供を生むこと」。

註

- (1) 『生まれてこないほうが良かった——存在してしまふことの害悪』(小島和男・田村宜義訳、平成29、すずさわ書店)。以下、ベネターの言説は全て同書に拠る。
- (2) 川上未映子の『乳と卵』(平成20、文藝春秋)には、「お母さんの人生は、あたしを生まんだったらよかったやんか、みんなが生まれてこんかつたら、なんも問題はないように思える。うれしいも悲しいも、何もかもがもつからないのなもの」という思いを抱き、「あたしはぜつたいに大人になつても子どもなんか生まへんと心に決めてある」十二歳の少女・緑子が登場し、その八年後を描いた『夏物語』(令和1、文藝春秋)には、非配偶者間人工授精(AID)で生まれ、その後断固たる「反出生主義者」となった善百合子が登場する。『夏物語』巻末の「主要参考文献」には

〈子供〉を生むこと

ベネターの「生まれてこないほうが良かった」が挙げられており、「自分の子どもがぜつたいに苦しまずにすむ唯一の方法っていうのは、その子を存在させないことなんじゃないの。生まれなくていいさせてあげることだったんじゃないの」という善百合子と主人公・夏子との白熱する対話の中に、ベネター經由の「反出生主義」の痕跡を確認することができる。本論との関わりでいえば、埴谷の「死霊」において「反出生主義」を唱えるのが男性であるのに対し、川上の作品においては女性であるというジェンダー的反転が注目されるだろう。

- (3) 埴谷雄高「カントとの出会い」(『カント全集』第三巻付録、昭和40、理想社)

(4) ドストエフスキー『地下室の手記』(一八六四)の引用は江川卓訳(昭和44、新潮社)に拠る。同書は未来のユートピア社会主義(水晶宮)を描いたチエルヌイシェフスキー「何をなすべきか?」(一八六三)に対する反ユートピア文学としての側面があり、『死霊』を反ユートピア文学の系譜に位置付ける本論とも無縁ではない。ただし、「子供」のモチーフ自体については、たとえば「イワンの叛逆は、子供虐待辞典とでもいふべき事例の集大成から始まつてあるが、子供達を人世の証人とするところから出発してあるイワンの叛逆は、子供達こそ生の基本的な象徴であるといふ確信の上に立つてある」(ドストエフスキーの位置、「文学」昭和31・9)と埴谷自身が記すところの『カラマーゾフの兄弟』からの影響が推定される。

- (5) 埴谷雄高「ドストエフスキーの撰取」(日本近代文学館編『日本近代文学と外国文学』所収、昭和44、読売新聞社)

(6) 二つの「自由意志」のうち、「自殺」についてはドストエフスキー「悪霊」におけるキリーロフに負うところが大きいだろうが、「反出生主義」の側にドストエフスキーとは異なる埴谷の独自性が認められる。

- (7) たとえば「一番初めの生物は単細胞で、男も女もなかった」として「人類はあらゆる技術を進展させて自然を変化させてきた。与えられたオスとメスさえ変化させるかもしれない。メスが子供を産まなくなるかもしれない。直立猿人はいよいよ雌雄のない超人類にまで踏みこむかもしれない」と夢想する埴谷のエッセイ「変革の時代に」(『東京新聞』平成4・

3・16〜19、夕刊)や、「処女マリア」に始まる「人類に於ける処女生殖」の系譜を辿り、現代にその可能性を探る「単性生殖」(『近代文学』昭和31・6)等を参照されたい。

(8) 「単性生殖」(「単細胞」と「単独者」性の接続については、埴谷の「想像力についての断片」の英訳について——ワゴさんへの感謝とお詫び) (『翻訳の世界』昭和57・9)における以下の記述を参照されたい——「「単細胞」の「単」が私の場合、極めて重要な出発点で、その単は、数十億年後のずっとあとにもステイルネルの唯一者 Der Einzige、キエルケゴールの単独者 Der Einzelne、また極めて大きくいえば全宇宙における「私」、そして、いま私の「自同律の不快」にまでひきつがれているところの文字通りユニークなものであって、そして、それは「自己分裂」するのである。この「自己分裂」を外界によってつき動かされた発展とみるか、それとも、自己内部における「不快」の極の現われとみるかは、思想上の問題である」。

(9) 『エレホン』の引用は山本政喜訳(昭和10、岩波書店)に拠る。

(10) 芥川の「河童」へ及ぼした『エレホン』の影響については、早く吉田精一が『芥川龍之介』(昭和17、三省堂)の中で「河童」は芥川自ら「グァリヴァの旅行記式のもの」と称した「寓意的な小説」であり、「トマス・モアの『Utopia』から、モリスの『News from nowhere』更にサミュエル・バトラーの『Erewhon』」の系譜に位置すると指摘し、「その発端や、部分的にはもつとも『Erewhon』に近い」としている。後年、吉田は「芥川龍之介集解説」(『日本近代文学大系38 芥川龍之介集』所収、昭和45、角川書店)の中でより詳細にバトラーとの類縁に触れ、『エレホン』における「赤ん坊の出生告知状」の「くだりなどは、『河童』では、赤ん坊が自発的に出産を拒否するという、巧みな「芥川化」をほどこされている」と指摘している。

(11) 新宮一成は共同討議「生の哲学と死の欲動」(『批評空間』平成9・10)の中で「河童」の出産の場面に触れ、河童の胎児が自ら意志して「生まれてきた場合は、最初から自己であるということになってしまいうわけで、それはほとんど狂気すれすれの精神構造だ」ということを、芥川は既に意識している」と指摘した上で、「人間が自分自身で自分を意味付け

ようとする欲動、芥川の河童の赤ん坊のような欲動の現実性」を議論の組上に載せている。

(12) 谷川健一との解説対談「『ドグラ・マグラ』の形而上性」(『夢野久作全集6』昭和44、三一書房)の中で埴谷は、「夢野久作は「胎児は胎児の夢によって成長する」という論理的なテーゼを打ち出し、「単細胞の発生」を経て「さまざまな系統発生の歴史をたどりながらやがて人間にまでたどりつく」その「全歴史」を「胎児の夢」の中で再現」させることで「生物とはなんぞや」と問う「すばらしい生物論をやっている」と激賞している。

(13) ベネターもまた食物連鎖に触れつつ「人間は人間以外の種にとつての無数の苦痛の原因」であるとして「人類絶滅は害悪の総量を大いに減少させるだろう」としている。

(14) 埴谷とはまた別の形で(人間中心主義)の顛覆を画策した批評家に、埴谷と同年生まれの花田清輝がいる。花田の構想した顛覆(『革命』の内実については拙論「(人形)のレジスタンス——花田清輝の(鉦物中心主義)的モチーフと(革命)のヴィジョン」(『日本近代文学』平成28・11)を参照されたい。

(15) 埴谷雄高「可能性の作家と不可能性の作家——夢と想像力」(『文学界』昭和35・10)

(16) 加藤秀一(『個』からはじめる生命論(平成19、日本放送出版協会)の中に、「非在者を代弁」する「語り」の危うさに警鐘を鳴らす指摘があり、「死霊」読解において参照した。また同書には「自分の生は損害である、自分は生まれない方がよかった」として「先天的障害をもって生まれた子ども自身」が「出産を回避できるような親の確な情報を与えなかった医師の過失責任を問う」「ロングフルライフ(wrongful life)訴訟」の紹介と分析があり、論理的には必ずしも障害の有無に限定されることなく「人生に対する絶望があるところには偏在」している筈の(『反出生』をめぐる生命倫理的な問いとして示唆を受けた。

(17) 『埴谷雄高は最後にこう語った』(平成9、毎日新聞社)。松本健一が「河童」の出産の場面を投げ掛けたことに対する埴谷の直接の応答は残念ながら無い。芥川との関わりでいえば、白川正芳の『埴谷雄高との対話』(平

成18、慶應義塾大学出版会)の中で埴谷は「芥川は哲学的な自殺でした。人間とは何かだけにいつてしまった。生物とは何か、犬とは、猫とは何かにまでいつていけば自殺せずにすんだ」と発言しており、自らの存在論の枠組みの中で芥川に「人間中心主義」的な限界を見出している点が注目される。

(18) 埴谷雄高「薄明のなかの思想——宇宙論的人間論」(昭和53、筑摩書房)所収。「生誕について」は同書の劈頭に置かれ、「生殖」と「子供」に関する埴谷の思考のもつとも分かりやすく纏まったものと言つてよい。

(19) 「存在の畏」という言葉は、たとえば『死霊』七章の中に「食いに食つてなおいぬ食細胞」と「産んで産んでなお産み足らぬ生殖細胞」の奇怪複雑に相乗されたところの薄暗い「存在の畏」といった形で記されている。

(20) シオラン「生誕の災厄」(出口裕弘訳、昭和51、紀伊國屋書店)。同書には「責任という問題は、出生以前に私たちが相談を受け、現在ただいまそうある」とき人間になつてよい、と同意したのでなければ、そもそも意味を持ちえないはずである」という「河童」や「エレホン」に共振する一節もある。

(21) 鹿島徹は「埴谷雄高と存在論——自同律の不快・虚体・存在の革命」(平成12、平凡社)の中で、「ドストエフスキのポリフォニー小説を範とし支えとする」ことによつて「鋭く対立しあつた極端な諸立場の多声的呈示」を志向していた筈の初期の『死霊』が、次第にその「ポリフォニー性に大幅な後退」を生じさせ、たとえば七章の矢場徹吾による「長広古」に典型的なように「作者の自説独吟の道具」へと変質していった過程を詳細に分析している。その変質を前提とした上で鹿島は、「三輪与志の存在論志向」に単一化されていく作品世界を顛倒するべく、「ポリフォニックな小説世界を支える不可欠の柱であつたはず」の首猛夫の可能性をあえて前景化することで『死霊』のポリフォニー性の取り戻しを試みる解釈実践を展開しており、四兄弟の「出生」をめぐる言説の裡にポリフォニックな差異を読み込む本論において重要な示唆を受けた。

(22) 埴谷との対談「意識・革命・宇宙」(昭和50、河出書房新社)の中で吉本隆明は「三輪与志と尾木恒子との対話の根底になつてくる思想が相互に

「子供」を生むこと

あるとすれば、僕はむしろ、保母さんのほうの思想に即してきましたし、そしてそういうものをとりまますね」と語つており、四章のこの対話の中に、吉本自身の「少数特異ではない、大多数の人のやることは、全部やつてみる」という「大衆の原像」と埴谷の「生々しい生活感覚からかなりはなれたところで構築された世界」とが対照的に浮かび上がる重要な場面となつてゐる。

(23) 大澤真幸は「未来への／からのメッセージ——男はなぜ幼子を抱いたのか」(『群像』平成15・5)の中で、「子供嫌いだった三輪与志が赤ちゃんを抱いたということが決定的な出来事であることの意味」を、「子供幼子」が「私」の意志の制御に内面化され尽くされることなく「私」を触発する他者である点に見出し、「私は私である」という閉じた循環を内側から支える他者性を、三輪与志が受け入れた瞬間だった」としている。「反出生主義」を鍵とする本論とは視角を異にするとはいえず、高志的な「私」の単独的な存在の純粹性を「侵す」ような「反転への契機」を赤子を抱き上げる与志の裡に看取するこうした視点は、四兄弟のポリフォニックな差異化を試みる本論にとつても示唆的であり、参照した。

(24) 埴谷が「赤ん坊」に「起動力」を託す言説は実には多い。たとえば「このついに誰もやつてこぬ深い闇のなかの赤ん坊の泣きあげこそ、私達の存在論の出発点にはかならない」という「自然と存在——戦後文学を中心として」(『全集・現代文学の発見』8 存在の探求下)所収、昭和42、『學藝書林』や「赤ん坊は何故むずがつて泣くか」という問いを立てるのは「これまでの自同律の厳然性をなんとか脅かすためにほかなりません」という「論理と詩の婚姻について」(『週刊読書人』昭和42・2・20)等を参照されたい。また変わったところでは、村上龍「コインロッカー・ベイビーズ(上)」(昭和55、講談社)の埴谷の手になる推薦帯文があり、そこで埴谷が「温かな胎内で母の心音を絶えず受けつけつけ同じ鼓動を敲つまざれもない人間となつて誕生した赤ん坊が、鉄のコインロッカーの冷たい四角な胎内へ捨てもどされるといつた生自体の解体、生の連鎖の直接的な断絶」に「文学的に立ち向かい、『解体の果ての生』のなおひるみもないかたち」を「拾いあげ描出し」た村上龍を高く評価してい

る点も注目される。

(25) 植谷雄高・立花隆「無限の相のもとに」(平成9、平凡社)

(26) 生殖テクノロジーに対する植谷の関心は早い時期からあり、たとえば「性的人間」(『山形新聞』昭和40・5・28)の中に「これまで、自然の進化にまかせられていた生と性は、不思議な発明の才能をもった人間の掌のなかに、今後自覚的に置かれることになって、自然を越えた人工的な突然変異をやがて呼び出すことになるに違いない」といった記述がある。さらに続く「もつとも、その場合、新しく出現したその性的人間はもはや人間と呼んでいいかどうかはわからないけれども」といった言説の裡に、「生と性」の「人工的な突然変異」を通じて、「ポストヒューマン」を夢想する植谷の〈存在の革命〉のヴィジョンを垣間見ることまでできるだろう。

(27) 立花の発言の裏には立花が利根川進と行った対談『精神と物質 分子生物学はどこまで生命の謎を解けるか』(平成2、文藝春秋)があり、たとえば同書の中には「有性生物の親から子が生まれるとき、必ず両親の遺伝子が組み換えられて子供の遺伝子になる。あの組み換えで多様性が生まれるんですね。また、あの組み換えによって、ある個体に突然変異で生まれた新しい形質が、その種全体に広まっていくことになる」という利根川の発言がある。植谷も前掲『無限の相のもとに』の中で同書に言及し、人工的な遺伝子の組み替えによって分子生物学が拓く未来に多大な関心を寄せている。

(28) 植谷雄高「男と女、と、雄と雌」(『遊』昭和57・7)。また同様の視点は「はじめは、単細胞というすっきりしたかたちで、「自己分裂」をなしとげたのに、それから数十億年もの「進化」とやらを重ねに重ねたあげくに、雄と雌、男と女、というたった二つの性しかない単純な「生殖枠」をつづけにつづけて、ついにいまだにそこから脱却できない長い過渡期のなかに、この私も投げこまれて」といって嘆息する植谷の「裸体の時代」(『現代の裸婦美術』所収、昭和57、河出書房新社)にも何うことができる。

(29) リー・エーデルマン「未来は子ども騙し——クイア理論、非同化、そして死の欲動」(藤高和輝訳、『思想』平成32・5)

(30) 「再生産的未來主義」はエーデルマンによる造語だが、栗原幸夫との対談「植谷雄高語る」(平成6、河合文化教育研究所)の中で植谷は「死霊」でもそのことは書いているけども、たえず子供から出発するということは人間の条件なんです。この人間の社会的条件を支配者はうまい具合に使って支配の方へ赤ん坊を引っ張って行っちゃう。学校も会社もぜんぶそのための道具になってい」と「再生産的未來主義」のイデオロギー性を鋭く見抜く発言をしており、子供の「再生産」が社会秩序の「再生産」(持続可能性)に動員されていく回路に対するこうした批判的視点は、「死霊」を〈反出生主義〉を通して読み解く際のアクチュアリティの一つともなっている。

(31) 高良留美子は「女性への「精神のリレー」」(『植谷雄高全集 第六巻』月報、平成11、講談社)の中で、「三輪家のひとびと」が「すべて、「男」そのものにほかならぬ」(九章)ことに気付く安寿子の「急速な成長」の裡に「日本の反体制運動の男性中心主義への総体的な批判」を読み取り、最終的に「与志とその精神的一族の全思考は、安寿子という一人の女性にパトントッチされた」としている。本論はこのようなフェミニズム的読解の可能性——むしろフェミニズム的視点からいえば「死霊」は容赦なく弾劾されるのが当然だろう——を斥け、〈反出生主義〉を中心に展開される四兄弟の倒錯的なクイアネスに孕まれる批評性を前景化する試みに他ならない。また、〈芸術〉と〈実生活〉を往還して貫徹された植谷の〈反出生主義〉に向けられたフェミニズムからの批判については拙論「私小説」としての『死霊』——〈反出生主義〉をめぐる植谷雄高の〈芸術〉と〈実生活〉」(『愛知大學國文學』令和3・1)に詳しく併せて参照されたい。

※ 『死霊』の引用は全て『植谷雄高全集 第三巻』(平成10、講談社)に拠る。引用に際し適宜旧字体は新字体に改めた。引用文に付した傍点と省略記号(……)は引用者に拠る。